

会議録（要旨）案

件名	令和7年度 第2回亀岡市総合教育会議		
日時	令和7年11月20日（木）	報告者	企画調整課 門 真理
	午後1時～2時50分	場所	市役所6階 602・603会議室
出席委員	9人 桂川市長／石野副市長／佐々木副市長／ 川勝教育長／北村教育長職務代理者／末永委員／出藏委員／ 松浦委員／野々村委員		
欠席委員	秋山委員		
事務局出席者	17名 中川教育部長／飛田教育部次長兼総括指導主事／数井教育総務課長／今西学校教育課長／黒田学校教育課教育支援担当課長兼学校教育課指導主事／伯耆学校教育課指導主事／小林社会教育課長／森岡社会教育課人権教育担当課長兼社会教育係長事務取扱／岩崎学校給食センター所長／西山図書館長／大石みらい教育リサーチセンター所長／広瀬みらい教育リサーチセンター指導主事／ 片山市長公室理事／山本政策企画部長／川内企画調整課長／横山企画調整課企画経営係長／門企画調整課主事		
傍聴者数	0名		

1 開 会（川内企画調整課長 進行）

2 桂川市長あいさつ

3 報告

（1）「大阪・関西万博」児童生徒体験事業について

川勝教育長（報告）

4月13日から10月13日まで、大阪・関西万博に本市の小学校、中学校、義務教育学校全員が体験した内容について報告する。最初は開催直後の4月25日に蕨田野小学校が、最後に9月25日のつつじが丘小学校の2年生が行き、全員が体験できた。参加人数については、6,112名に参加してもらい、大きい学校について

は1日で1校はいけないため、38団体に分かれて万博へ行った。

(スライドをもとに説明)子どもたちは、とにかく目をキラキラさせて見学していると多くの先生から感想をいただいた。中には家族で行ったこともある子どももいたと思うが、学校で見学するという機会がなければいけなかった子どもたちも多くいると思うので、今回、亀岡のすべての子どもたちが、学校や学級単位で体験できたことは大きな成果である。

前回の報告でもあったとおり、年々増加している不登校の生徒児童220名のうち、95名が参加できた。体験後に何らかの形で友人と交流が深まる、家から出るようになるというように、今回の万博事業がプラスに働いた。

当初心配されていた暑さについて、若干バス酔い等で体調を崩していた生徒児童はいたが、結果的に熱中症になった生徒児童は1人もいなかった。特に先生方は、バスガイドのようなオリジナルの旗をもって誘導いただいており、ほかの市町の学校ではなかった取組みだった。

アメリカ館やコモンズでの交流や、国連パビリオンで国連職員と交流することもできた。普段テレビを通してみていたことが実際に体験できたのは良かった。蕨田野小学校や保津小学校では、ウクライナのブースにて、本市の子どもたちの貸し切りのような形で交流の時間を取ってもらった。マリーゴールドの種をいただいたので、学校で育てて未来で咲き誇る絆になるような継続した取り組みにしていきたい。

体験後、どのような振り返りを自分で、学校でしたかということが大事である。小学校1年生から中学校3年生までで、いろんな体験の中で受け止め方が違ったと思う。友達の感想を聞いたり、自分の感想を言ったり、双方向の時間をどの学校にもしっかり時間を取っていただいた。実際にその場に行かないと体験できなかったこともあり、感想文を書く以外に、自分から家で話している子が多かったと保護者の方から連絡帳などにも書いてきていただいております、大変貴重な時間、貴重な意見交換であったと考えている。

亀岡市では人権と平和、環境という3つの柱をもとに教育活動を進めており、今回は特に平和ということが前面に出て、いろいろリンクさせながら今後にしっかり刻んでいきたい。

暑さの関係で、市長部局から保健師等、延べ84名が応援いただいた。学校の先生だけで子どもたちを引率するのは大変だったと思うので、サポート体制をしっかりとっていただいたおかげで今回の大きな成功にも繋がった。

桂川市長

教育委員も引率で万博に行っていたかと思うが、感想などあれば。

委員

私は9月21日に、亀岡小学校1年生の引率について。閉幕間際だったために、

多くの来場者で、入場するのにも時間がかかり、パビリオンもいっぱいだったので、結局1つも入れずじまい、昼食は大屋根リングの下で地べたに座って食べた。その場の空気感や伝わってくるものはありいろいろなものは見るができなかったが、行った後にニュースなどを見るとときに確かに自分はその場所にいた、友達と一緒に体験したということは蘇ってくると思う。

桂川市長

当初開会前は、市長の手紙などでも何十通と、低学年を連れて行くのは危ないといった批判的な意見があった。結果としては大成功に終わり、多くの子どもたちに体験してもらったり、不登校だった子どもたちも行けたりしたことは良かった。ご協力いただいた先生方、教育委員の皆さまに感謝する。

(2) スタディ・アブロードプログラムについて

佐々木副市長（報告）

11月8日から14日にかけての7日間、スタディ・アブロードプログラムとして台湾に行った報告をする。今回のスタディ・アブロードプログラムは亀岡市内の中学生7名、随行者3名の計10名で台湾を訪問した。随行には亀岡中学校の高橋教頭先生にも同行をいただいた。スタディ・アブロードプログラムとは、亀岡市の姉妹都市や或いは友好都市に中学生を派遣する事業であり、昨年はオーストリアのクニッテルフェルト市、一昨年はアメリカ合衆国のスティルウォーター市で同様の事業を行った。

（行程表を見ながら説明）11月8日土曜日の朝7時に亀岡市役所を出発し、関西国際空港から台湾北部の桃園国際空港がある台北市に向かった。この日は台北市内をバスで見て回り、市内ホテルにて宿泊した。翌9日に午前中は台北にある故宮博物院を見学し、午後にバスで宜蘭県の国民中学のある羅東というところへ移動した。羅東は、亀岡市よりも少し規模は大きく、郊外には広大な農地が広がり、環境は亀岡市に近い雰囲気を感じた。また、年間230日雨が降るため羅東では傘を忘れてはいけないという言葉があり、実際に子どもたちもホストファミリーから傘は必ず持ってくるようにという連絡を受けていたほどに雨の多い地域である。台湾は沖縄よりもさらに南にあるため、訪問したこの時期でも、朝方は半袖で全く問題ないほど、日中は汗をかくほどの気候だった。稲作は二期作が可能であるが、台湾においても米の消費量が減っているため、年に1回の収穫で足りるとのことであった。

9日の夕方には、歓迎会とホストファミリーとの対面式が行われ、生徒はこの日からホームステイを開始した。10日の月曜日から中学校の体験授業が始まり、ホストファミリーと同じ教室に配属をされ、7人の生徒が3つの教室に分

かれて授業を受けた。学校は朝7時半から開始され、30分ほどホームルームを行っており、各クラスでは亀岡の生徒の歓迎会が行われた。

授業は基本的に中国語で行われていたが、ホストファミリーの生徒が英語でサポートをしてくれていた。音楽の授業には日本のアーティストの米津玄師の楽曲を使ってくれており、訪問団に対する配慮が随所に見受けられた。その後、宜蘭林業園を見学し、木材の集積場であった歴史や木育に関する取り組みを学んだ。午後からは地元の名産品である葱の収穫体験と葱のパイづくりを行った。このときも大雨だったため中止にするか担当に確認したが、羅東は年間230日雨が降るため、雨ぐらいで行事を中止にできないとのことであった。

しかし、翌日、翌々日は台風の影響もあり、学校は2日間休校になった。あとで生徒たちに聞いてみると、11日は各家庭で伝統料理などを作り家で過ごしてもらい、12日はほぼ晴れていたため、各家庭で観光に行き、親睦を深めたとのことだった。11日は特に大雨の影響が深刻で、一部の家庭では停電や、ホストファミリーは無事だったが、親族の家屋に被害が出て急遽1名の生徒が中学校の先生の家でホームステイすることになった。この件について担当や中学校が緊密に連絡相談、情報共有できたので、派遣の生徒、保護者にも説明でき、大きな問題もなく行程を進めることができた。

13日には羅東を出発し、台北から西の台中市へ移動し、台中市役所への表敬訪問や歌劇院なども見学した。恵文国中学校では生徒同士の交流として、学校生活での比較や将来の夢などの意見交換を行っていた。その後訪れた台中緑美図は図書館と美術館を融合させたような施設で、生徒は大きな刺激を受けていたように思う。最終日は新竹サイエンスパークに行き、台湾の半導体技術やテクノロジーの見学を見ながら勉強し、その後空港から帰国した。

今回初めて台湾のスタディ・アブロードプログラムで、母国語は中国語だが生徒たちは第2言語の英語を使って非常に積極的にコミュニケーションをとっており、非常に楽しそうに見えた。

近年はスマホの翻訳アプリも発達し、コミュニケーションに不自由さを感じることもなかったが、英語ネイティブだけでなく、英語ネイティブ以外の人たちと英語を介してコミュニケーションをとることはとても大事である。

これからの国際社会の形であり、参加した子どもたちも非常にいい体験ができたと思う。

本プログラムの終盤に、英語を使ってその人と話すっていう感覚が沸いたか尋ねると、非常によくわかる、今は日本語より英語がすぐに出てくるということ話を話していた。一緒にタクシーに乗った生徒は、英語のわからないタクシーの運転手に対し、中国語で話してコミュニケーションを取っていた。

出発前の研修会では、英語も中国語も自信がないと話していた生徒が、英語だけではなく、第2外国語にも挑戦したいと言っていた時は大変感動した。

生徒たちは通訳のない環境の中で、慣れない英語そして中国語を駆使し、ホストファミリーや台湾の生徒たちが一生懸命サポートしてくれる中で、コミュニケーション、そして友情を確かに形成していた。

通学する予定の3日間のうち2日間の休校だったため、落胆しているのではと心配していたが、楽しかった、非常に有意義だったと言っていた。

先ほどの万博も同様だが、中学生の年齢で外国に行って、同世代の子どもたちと交流をして、文化に触れた今回の経験がどんな形であれ、子どもたちが、今後の進路選択などによって、間違いなくこの選択の幅を広げたと思う。

出発前に大変おとなしい印象の生徒たちだったが、帰り際に頼もしく見えたのは気のせいではないと思う。

今回の事業にあたり、生徒の体調不良や大きな事故もなく無事に終わることができたのも、ご協力をいただきました学校関係者や保護者の皆様、市の関係部局、すべての関係者の皆様のおかげであると感じている。

そして台湾の行政、そして学校関係者の皆様には、受け入れにあたりかなりの準備をしていただいたことが良く分かった。羅東中学校での授業の内容や訪問団への盛大な歓迎など、細かいところまで気を使っていたおもてなしに、生徒を含めた全員が感動していた。こうして歓迎いただいたことを、亀岡市に来ていただいたときにお返しをしながら国際交流の輪が広がっていくものと思う。生徒からの全体報告会が12月21日日曜日にガレリアかめおかにて開催するので、是非生徒自身が語る成果を聞いてほしい。

来年以降もスタディ・アブロードプログラムが続くので、台湾との交流をさらに進めていくように調整しており、今後も皆様のご協力をいただきながら活発に交流を続けていければと考えているので、引き続きよろしく願います。

そして、来年からも私たちブロードプログラムが続いて参ります。

台湾との交流をさらに進めていくように調整をしております。

桂川市長

来年のスタディ・アブロードプログラムは、台湾から亀岡市へ来る予定をしているが、要望や要請があり、宜蘭県もだが、台中からも来たいとの話が出ている。どのように受けるか調整したいと考えている。また、オーストリアのクニッテルフェルトからも来る予定であり、台湾は亀岡中学校に、クニッテルフェルトは川東学園で対応するよう計画している。また、今後はアメリカのスティルウォーターへ亀岡の子どもたちを派遣する予定であるため、よろしく願います。

3 協議事項「教育施策の重点事項」について

(1) 英語教育について（資料1）

川勝教育長（説明要旨）

協議事項の1つ目の英語教育について意見交換したい。今の日本の英語教育の現状、英語技能が習得できるのか、海外での英語教育の学習の現状や、新聞等でも報道されているALTの具体的な活用がどのようなところで大きな成果につなげていけるかを協議できればと考えている。

まず1つ目の課題として、英語教育の現状について説明する。日本の英語教育は受験のための英語である。経験してきたと思うが、完璧な文法ができていれば、テストは満点に近づく、ということが拭き切れていないという現状がある。また、ゴールが受験となっており、受験が終われば英語に対しての関心がなくなる人が非常に多い。

2つ目の課題として、日本に住んでいると英語で話す機会が教育上少ない。単語と文法が正しく理解することに時間をかけており、アウトプットの時間が本当に少ない。

また、海外に比べて年間の英語の学習の時間が極端に少ない。文部科学省が示す単位数は、中学校で週4時間、50分授業のため、週で200分。小学校5、6年は英語の授業があるが、週2時間で45分授業のため、週90分である。中学高校では年800時間しか勉強できていないことになる。ビジネスや日常生活で英語を緊張せずにいろいろな話題をやりとりしながら社会生活を送るには、海外では1850時間必要との調査結果もある。中高の800時間を除けば、大体1日2時間を約2年半かけないといけないため、今の日本の教育システムでは難しい。最後の課題として、英語教員の指導力が低いことである。中学校教師で準1級を持っている先生は、現状40%。高校で準1級以上持っているのは75%のため、海外の英語の指導者の差が大きいのでは。意見交換をお願いします。

委員

参考に私が今までいた環境のことを紹介させていただく。勤務していた高校は、大学へ内部進学するためにTOEFLで400点以上を取るという1つの基準がある。中学から高校の進学にも英検3級を全員受験するという基準がある。TOEFL400点は海外等への留学や大学院を目指すうえでの目安にもなる。

目標をあらかじめ設定されており、大学へ進学するにはこの基準が必要不可欠であり、そのために勉強していた。日本は大学へ行くために英語の文法や読解力などは優れているが、コミュニケーションとして人と話す機会が少ないように思う。そうなると楽しむ英語ではなくなってしまう。国際のフォーラムや海外研修での引率で海外に行くことも多いが、韓国は少し特殊でネイティブ教員と共に会話力を重視しつつ、受験勉強、資格試験対策もしているので、しゃべることもでき、英語の勉強もできる。幼稚園の年齢くらいから英語と関わり、歌や遊びなどゲーム感覚で英語と楽しむ。亀岡市がALTの教員を増やすということ

あれば、会話力対話力を重視したシステムで正しい英語を学びながら実力を上げていく形が理想だと感じる。また、せっかくの機会でもあるので、亀岡市自体を理解していただきたいので、学校の組織だけにいるのではなく、地域住民と様々な取り組みやイベントに参加し交流を深めながら、生徒の英語コミュニケーション能力の向上できる教員を養成して欲しい。

委員

毎年年度始めに案内のチラシを作成し、各家庭に配布しているが、特に年度初めは様々なお知らせが大量に配布される。年に何回かに分けて連絡しなければならないと反省しているところ。

桂川市長

学校にPRポスターを掲示するなど、機運を盛り上げるための取組が必要なのでは。日ごろからみんなで受けようという雰囲気を作っていくことも1つのきっかけになると思うので、教育委員会と考えていただきたい。

委員

大阪・関西万博では、子どもたちは様々な衣装を纏った異文化の人々に興味を持ってもらいいい体験だった。スタディ・アブロードプログラムの台湾訪問において、相手は母国語が中国語、参加した子どもたちを含め私たちは母国語が日本語のため、イングリッシュネイティブではないが、それを介在させるために英語を使う。自分とは異なる文化を持った人たちとどこか繋がって見たかったり、話してみたかったり、知ってみたかったりすることがとても大事であると改めて感じた。先ほど川勝教育長からの話では、受験のために英語するのではなく、コミュニケーションをしたいから、やりとりできる手段としての英語へのシフトはとても大事であると思う。

先月、ウズベキスタンとタジキスタンに行ったが、旧ソ連構成国であるため英語圏ではない。ホテルなどは英語でのやり取りが可能であるが、観光地のお店の方などは詳しい話は英語では難しい。グーグル翻訳や英語の活用により現地の方とやりとりすることで、文化や考え方の違いを楽しむことができる。

例えば推薦入試などでも事情が変わりつつあるので、英語教育のあり方について少し舵取りを変えていくというのも1つの契機になるかと考える。そこでポイントになるのが英語の先生たちの意思や方向性である。コミュニケーションのための英語に向かうよう意識を変えていくべき。

桂川市長

どこでやる気スイッチが入るかなっていうところかと考える。
本当に自分が英語をやりたいと考え、海外レベルまで到達するのに 1850 時間と
いうのを、クリアできるかっていうところもある。
そんな中、今後の計画も含めて教育長から願います。

川勝教育長

先ほど市長からあった気運を高めるということが大きなキーワードになると
考える。要するに生徒自身が勉強しようという思いをさせるためにどういう仕
掛けが必要か。授業の内容や仕方が面白いというだけでは駄目で、授業の回数が
現状文部科学省の定めでは、週 4 回しかない。英語教育を成功している国の特
徴を踏まえると、これを週 1 回ずつ増やしていったり、コミュニケーションの
活動を授業に盛り込む必要がある。また、特徴の一つに早い段階で英語を教え
ることが挙げられる。オランダでは 5 歳から英語教育を始めており、大学入学
する段階で全員が準 1 級以上である。

また、これまでの英語教育においてネイティブと話すことがいいという風潮
があったが、現在は逆。ノンネイティブ、英語学習したことによって習得された
人と話す機会を増やすことが重要。今回、亀岡には来年度からフィリピンからの
ALT が配属され、英語教育には効果的。海外のノンネイティブで英語を指導する
人の TOEIC は大体 950 から 990 で、英語を自由に扱えるレベルである。そうし
た ALT と会話し、授業の回数を増やすことと、授業以外でどれだけ英語に向か
うかだと思ふ。例えば ALT と会話する中で、授業以外の英語をどれだけ使うか。
パソコンやタブレットを活用し、指示やアドバイスをもらうことで、家でも英語
に触れることができる。

英語学習を早い段階で始め、毎日行う。英語の先生の指導力を高める。そして
最後にノンネイティブであるフィリピンからの ALT の方の活用の仕方で大きく
変わってくると思う。

委員

幼児教育の観点からではあるが、一般的に幼い子は聞き取りの感覚が鋭いと
いわれており、海外の国の言葉を聞くことは聞き取りの能力があがることに効
果があると思われる。また、ご飯をのこさず食べたる、歯磨きをする、ドアの開
け閉めをする、蛇口の水を止めるなど、日常で必要とされるあたりまえのこ
とを行うことができる子どもは、学力でも高い傾向にあるとされている。

まずしっかり伝わる言語でやりとりができ、文化的で知的な会話が日常で行
われることが大切である。外国語習得にも良い影響を及ぼすということがあ
ると聞いている。私の知る専門家が、外国語を無理に教えなくても、しっかりと家
のなかで、母語で会話をするのが、大事というようなことをお話しされていた。

例えば、イギリスが多文化で幼児教育施設がたくさんあるが、多文化や言語が違う子どもたちの中で、応答的な会話が大事であるということが言われている。確かに翻訳を使うと相手との応用的な会話が可能であるが、子どもたちが機械を使うのは難しいこともある。また、そこで絵本の読み聞かせをする方が、お話しされたのは、言語習得のために意図的に働きかけていることは、インタラクティブな読み聞かせ双方向のやりとりなどを大切にしているということであった。子どもたちの間で興味のある雑談の中から、色々な引き出しをお互いに披露し合うということはとても有効だと感じている。

英語を学ぶための動機づけについて、世界では30億人の人が英語を使うので、その方々とつながることができるってということが一番大切だと思う。例えば平和教育や世界で起こっている課題を話あっていくことが大事である。

また、亀岡市にはサンガスタジアムがあり、スポーツの中でサッカーが、最も多く楽しまれているスポーツといわれていると聞いた。スポーツと言語、観光と言語は、結びつきやすい。子どもたちにとって勉強は楽しくないと思うことがあるかもしれないが、遊びながら学び、楽しみながら暮らし、その延長線上に英語があることが素敵ではないかと考える。

委員

今NHKでばけばけという朝ドラを放映しており、登場人物が松江に来て、英語の授業をする場面がある。実話に基づくもので、授業では一切日本語は使わず、オールイングリッシュで進めていた。その後東京へ赴任するも、大学の求める英語教育でなかったために解雇されたが、学生たちが辞めさせないようにと働きかけがあったらしい。

自分が学校に在籍していたときにALTの先生方はどのように活躍いただいていたかと振り返ると、補佐的な役割しか担ってもらっていなかったという反省がある。今までのALTの活用について学校が見直し、よりALTが主体となって授業を進めて行く方が効果的でないかと考える。是非、川東学園と育親学園で、先進的に進めて行ってほしい。また、ALTは学校に常駐いただくため、その英語の授業だけでなく、掃除や朝の学習、給食、休み時間など一緒に子どもたちと学校生活において英語で関わっていただきたい。その中で先生を含める人との関わりが上手に持てない子どもたちが、英語を通じて人とのつながりを見出す可能性もあるのではないかと期待している。ALTの先生それぞれが持つ異文化的な雰囲気为学校の中で良い形で影響すればありがたいと感じる。

桂川市長

現状ALTはどのような形で事業に関わっているのか、現状について報告いただきたい。

川勝教育長

正直に申し上げますと、ALT は主体的に動かず、そもそもそういった機会を学校側で与えておらず、補助的な役割を超えない。末永委員の報告の通りで、以前は更にひどい状況で、いわゆるテープレコーダーの代わりやその範囲を超えなかったが、当時と今と違う理由の1つとしては、ALT 自身に指導力がなかった。英語を週4回授業を設けるにあたり、そのうちの1回は全部英語でALTに授業していただきたいという思いがある。その結果を検証し、今後の本市の英語教育のあり方について議論したい。子どもたちにとってどのような学びがあると、より英語に対して関心を持ち、身近に感じるかということを検討したい。なるべくALTにも主体的に関わっていただければ取り組みにつなげていただければ嬉しい。

委員

さきほどの教育長の意見から、川東学園と育親学園がパイロットトライアルとして試行錯誤しながら進めていくことになる。検証ミーティングなどにも基本的にALTが入るべきであり、彼らが日本語を十分に使えないのであれば、英語でミーティングするべきである。本当のことを言うと子どももその主体となるべきであり、検証ミーティングに子どもたちも参加すれば有意義な会議になると考える。授業などでも主体性という言葉が出てくるが、実際には多くの場合で、限られた人たちにより決定され、子どもたちは受動になってしまう。ALTと一緒に検証を進めることができるか、もしできるのであれば、今までと違った文化になる言語取得において、どのようにアクセプトできるか。

委員

万博に関する事業を実施いただいたことに感謝申し上げます。本事業により、子どもたちが海外に触れる機会を得て、異文化への関心を高めるきっかけになっていると感じている。

こうした気運を踏まえ、ALTの新たな活用方法として、日常的に子どもたちと関わる機会を拡充することが重要であると考えます。また、教員自身が試行錯誤しながら取り組む姿を見せることは、子どもたちにとって失敗への心理的ハードルを下げ、主体的にチャレンジしやすい環境づくりにつながるものと認識している。

現在、世界には190を超える国と地域が存在しており、子どもたちが将来訪れてみたい国を具体的に思い描くことは、学習意欲の向上にも資するものと考えます。さらに、英語で考え、英語でコミュニケーションが取れる力を育むことは、国際交流の促進のみならず、相互理解の深化を通じた平和の実現にも寄与する

ものと考える。

そのような観点から、英語教育は平和教育の重要な柱の一つであると捉えており、今後も子どもたちが主体的かつ楽しみながら学べる仕組みづくりを推進していくことが重要である。

桂川市長

まさに郷との関わりをどのように、学校の中でできるかという面では、英語の先生方の意識を変えていくことが必要であると考え。そのためにはALTに自主的主体的に参加していただき、英語で議論するように決めればいいのではないかと考える。来年4月から新しく迎え入れるということになるし、併せて学校内で英語サークルを作るなど、英語を感じさせる取組を進めていただきたい。英語の面白さやコミュニケーションの多様性の中での英語のあり方を考えていただければうれしい。よろしく願います。

(2) これからの ICT 教育について (資料2)

川勝教育長 (説明要旨)

ICTのあり方について議論していくにあたり、これまでとこれからのICT教育でどこを目指して進めていくべきか説明する。

令和3年度に1人1台のタブレット端末、学校内のネットワークの整備により日々の各教科の授業や、授業以外の教育活動のスピード感も変わってきており、内容も具体化してきた。

亀岡市は授業でICT機器をどのくらい使用したかという調査において、全国と京都府を上回っている。また、インターネットを使って情報を収集することができるかという調査に対し、肯定的な評価が国、京都府を上回っている。ただし、情報収集に関しては活用できているが、収集した情報をまとめる力が弱いという課題が浮き彫りになった。情報収集はできるが、アウトプットの仕方が育っていない。また、教科学習、学力面でICT活用が左右されると考えている課題は「読解力」が弱いということ。国語の読解だけでなく、算数・数学の文章問題の読み取りができていない、何を答えたらいいのかわからない子どもが多い。せっかく情報収集の仕方等を身に着けているので、日々の授業の中で、課題を克服できるような授業改善に努めていきたい。

これに関するトピックスとして、条例でタブレット端末等の使用を2時間以内に制限するというものがあったが、この2時間以内というのは学習目的でのデジタル活用は制限の対象とせず、対象となるのは私的な娯楽使用にかかるもののみ。適度なデジタル機器の活用は学習目的であれば結果的にプラスに働くが、反対に、私的娯楽目的で1時間以上使用している場合は成績が少し低いとい

う調査結果が出ている。アナログベース、デジタルベースをバランスを考え、アナログからデジタルに転換するのではなく、デジタル教育も維持するし、本来のアナログ教育を、再度見直しが必要。そこも見据え、今後本市については、ICT活用を考えていくべきではないかと考える。

委員

実際に ICT 教育を行った経験について紹介させていただく。

私立であったため、文部科学省からの案内が出る 10 年以上前から ICT 教育に取り組み、教室は電子ボードを導入しており、各教員はノート型パソコンが貸与され、持ち歩き授業をしていた。

ICT 教育が始まったころからプレゼン資料を作成したり、映像に時間をかけて作成したり、今まで以上にわかりやすく授業ができていると自信を持っていたが、子どもたちがしっかりと理解しないまま授業を進めてしまっていた。子どもたち自身も積極的に授業に取り組み手応えを感じていたが、いざテストで評価すると、成績の良い人と悪い人で二極化した形になってしまった。探求心、興味関心を持ち学習意欲の高い人ほど成績がよくなるが、受け身のままの姿勢で、資料集めや検索作業で自己満足している子どもは成績が低くなる。今まで学力調査でパーセンテージは出るが、もしかすると実態は二極化しているのではないか。8 月に受講した教育セミナーにおいて、講師は対話を重視される方であった。その際に振り返りについて話をされており、教員が一方的に授業を進め、生徒が振り返れていなかったのではと反省した。ICT の取り組みを行いながら、子どもたちにも振り返る機会を与えることが学習の成果につながるのではないかと感じた。

川勝教育長

ICT に意識が大きくなりすぎているのは感じる。今までの授業の仕方を振り返り、考える段階に入ったのではないか。ICT が入ったことによって、小学校の授業時間 45 分、または中学校の 50 分間でどう切り替えるか。

委員

AI を活用すると、探したい答えがすぐに出てきて非常に便利だと思う反面、どう扱っていくか、アウトプットの均質性均一性が課題となると有識者等は語っている。

この分野の専門家の論文を読む機会があったが、アイデアを出せること、それを実行できること、その両方を兼ね備えている人は少ない。多くの場合は、アイデアがあっても実行力はない、またはアイデアがないので受け身で消費するだ

けの人と聞いた。そこに AI が寄与できることは、そもそもできる人は時間をかければできるし、アイデアがあっても実行力がない人には有効ではない。消費するだけの人には消費する方向だけしか進まず、安価で作ったような動画しか選択しないというようなことを書かれていた。

SNS の乱用などについて心配の声があるが、教育がどのように防波堤になるかということが問われている。AI が苦手とする道徳や自分らしさや憧れ、大人になっていく過程で感じるものなど、どのように考えていくのかが教育の防波堤であるということかと考えている。また、調べ学習では、AI を利用しても答えを示さずあえて気づきだけを与えるプログラムなどもあると聞く。

幼児教育において、小さい子どもは何かを見つけた時には自分だけの気づきとして大人に共感や承認を求める。それを繰り返すことで自分を理解してくれる人を増やすという行動につながっているが、それは社会化につながることであり、人間の生存本能に基づいている。自分だけの気づきがやがては社会の多様さにつながっていると考えている。自分だけの気づきを大切にし、AI を有効に活用できる子どもであってほしい。

桂川市長

プログラムという話があり、いくつか学習プログラムを入れていると思うが、実際役に立っているのか。

川勝教育長

ロイロノートは情報収集、提出、受け取りに活用しており、限定される範囲ではとても有効かと考えている。

桂川市長

実際に ICT を使っていくと特に読み書きにおいて、自分自身で書くことが少なくなると、漢字が出てこないときがある。

川勝教育長

現場として、字を綺麗に書くことは求めている。特に今は読めたらいいという段階に入っており、海外に目を向けてもアルファベットをきれいに書くということも全く価値がなく、大事なものは伝わるかどうかということ。だから書くことに時間をかけるのも必要ない時代ではあるが、特に日本は漢字もあるので一概に言えない。

委員

この学年であれば何字書けるようにするという目標があり、過去はプリント

に同じ漢字を何度も書いた覚えがあるが、今はそういったことはなくなってきており、英単語なども何個も書いてくるというようなことを宿題として課すことも減っている。代わりに漢字を学習するようなソフトもあり、GIGA スクールが導入されてからデジタルの環境が短期間でしっかり整ってきており、デジタルを活用することは避けて通れない。人材育成や子どもたち自身が生きていくツールとして使わざるを得ない社会の構造になってきているので、デジタルカリアルかという二項対立ではなく、どう活用するかということに注力していく必要がある。実際に学校についても、とにかくデジタルを使うという段階から、どのように活用してどんな学びを創造するか、主体的対話的で深い学びを創造するために、一層の工夫が必要である。調べて活用するためには、様々な分野で知識が必要であり、調べた結果、膨大な資料が出てくると、理解する力や資料の見方や考え方が身についていないと、正しい情報の取捨選択ができなくなってしまふ。結果に対する決定権、調べ、採用し、方向性を見出すことは機械ではなく人間が選択していくことになる。そうした人間を育てるために深い学びができる方向へ、デジタルを活用できる力や質を上げる支援を大切にしていけるべき。例えば亀岡市みらい教育リサーチセンターなどの場も使い、生きた使い方をして、子どもたちにどのような力をつけて、どのような子どもたちを育てていくかということを考える時代になったと実感している。今後、方向性を見出していく必要がある。AI なども的確な質問がないと答えが返ってこないもので、問いかけの在り方も学ばなければならない。

石野副市長

世の中で子どもたちが生きていく中で、なにが本当に大切なのか、どういった教育をしていくべきなのか、私自身も教育や子育てに関して、何が正しく何が間違っているかもわからない。

亀岡市の教育として筋の通ったものがあり、そこをしっかりと進めていく教育をすることが大事だと考える。

例えば、英語がしゃべれるけれども感じわけないけれども、IT はできてるが、成績が悪いというような子供の方があるのかもしれない。

佐々木副市長

今の世界についていくためには ICT 教育は必要である。

今回台湾に行った直前にも韓国へ出張に行ったが、東アジア圏で英語が普通に喋ることができないのは日本人だけという現実を見たときに、学校は非常に重い課題を抱えているということがよくわかった。確かに進むべき道は何が正しいかはわからないが、教育委員や先生方がしっかり検討いただいた方向性は合っていると考えているので、今後の活躍に期待したい。

4 川勝教育長あいさつ

5 閉会